

株式会社松井機業

より丈夫で紫外線にも強いしけ絹で
窓回りのインテリア商品拡充へ

本事業における成果

- より丈夫で紫外線にも強いしけ絹製造に成功
- 設備導入により生産効率が向上
- しけ絹を活用した商品の拡充

会社データ

- 創業 明治10年
- 設立 昭和22年3月20日
- 代表 松井 文一
- 所在地 南砺市城端3393
- TEL/FAX TEL:0763-62-1230
FAX:0763-62-1231
- U R L <http://www.shikesilk.com/>
- 資本金 3,200万円
- 従業員数 7人
- 取扱製品 創業以来一貫して絹織物業に携わる。現在富山県内で「しけ絹」を製織しているのは同社のみ。

絹、斜子、紋紗、杉綾なども生産している。近年はしけ絹を生かしたインテリア製品の開発、販売に力を入れており、現代のライフスタイルを意識した、しけ絹の新しい可能性を模索する。



1 会社の概要

城端の絹織物は今から約430年前に始まったと伝えられている。その城端にあって松井機業は初代の創業以来「しけ絹」を織り続ける老舗である。

通常は一頭の蚕が一つの繭をつくるが、まれに二頭の蚕が一つの繭を作ることがある。この繭を「玉繭」といい、玉繭からとれる生糸を「玉糸」という。しけ絹は、この玉糸を使って織った絹織物で、糸の太さが均一でないため、織ると独特の節目模様が見える。

同社では創業時より、しけ絹に和紙を裏打ちした「しけ絹紙」を製造。高級な襖紙として扱われてきた。分業が主流の繊維業界にあって、織りから精練して和紙張り合わせまでを一貫して行っている。

昭和40年代から和服離れや和風住宅の減少が進み、絹織物は徐々に縮小。伝統産業衰退の危機

を感じた松井文一社長は、生地を忠実に仕上げて納品することから一歩前に出て、しけ絹の特性を生かしたインテリア商品や内装材の開発に乗り出した。6代目見習いで三女の松井紀子さんと共に、商品力アップや販路開拓を進める。女性向けの新ブランド「JOHANAS（ヨハナス）」を立ち上げ、より身近にしけ絹を使ってもらえるよう、新しい楽しみ方を模索している。

2 補助金事業の内容

平成21年、インテリア用品の間屋から、しけ絹によるシェードの製造を勧められた。当時の「ものづくり中小企業製品開発等支援補助金」を申請し、シェードの開発を進めた。

その後は、国の地域資源活用プログラムなどの支援を受けて、ホームページなどのPRツールを整え、「インテリアライフスタイルリビング」や「ジャパントリ



昔ながらの手織りに近い感覚で織られる松井機業のしけ絹。節のある玉糸の製織は熟練の技術を要し、一日の生産量も限られる



国際見本市や都内百貨店の催事にも積極的に出展し、販路開拓につなげる

ーション」といった国際見本市でシェードやしけ絹をアピールした。そこで百貨店バイヤーの目に留まり、都内の百貨店での展示即売会に発展。25～26年には日本橋高島屋メーンホールの迎春および雛祭のディスプレイに、しけ絹のタペストリーが飾られた。

バイヤーから高い評価を受けるようになり、しけ絹の知名度が向上。相次いで開発した商品の売り上げも伸びて、販路も全国に拡大した。そこで同社は、しけ絹を活用したインテリア商品のバリエーションを増やすため、インテリアにより適したしけ絹づくりに着手した。製造と併せて、効率的な生産、商品供給が可能な体制を整えるため、本事業に申請した。

3 補助金事業の成果

絹には紫外線や乾燥を防ぐといった特性があり、しけ絹を使ったインテリア商品の強みの一つとなっている。絹の生産は製織後、生糸の膠質成分であるセリシンを取り除き、生地を柔らかくほぐす精練の工程を経て、染色、乾燥されるのが一般的だが、同社は精練せずに低温で染色する製造技術を習得。セリシンを残すことで特性が高まり、より丈夫なしけ絹が生み出された。



新しい設備で染色した「しけ絹」。紫外線防止効果やハリのある素材感など、絹がもつ素材の力をそのまま活かすことができた

これまでの染色作業は温度計を見ながら手作業で行っていたが、ボイラーと温度調節機械を導入。生産効率は約4倍高まった。

セリシンを残したしけ絹の染色は、城崎英明金沢美術工芸大学教授の指導の下、研究用の試験染色機で温度や染料、薬品濃度などのデータを集め、染色に最適な数値を探ることから始まった。データを基に無地染めの試作を行い、納得できる品質にたどりついた。ほかしやグラデーション模様の染色にも取り組んでいる。

4 今後の展望

独特のハリや風合いを保ちながら、機能性を高めたしけ絹は、

シェードを中心とした窓周り商品に活用していく。インテリアにこだわりを持つホテルや旅館、リゾート施設を中心に幅広い需要が見込まれる。

全国各地のデザイナーや工芸作家との交流も深まっている。フレンチレストラン向けにメニューに使うしけ絹紙やランプシェードを提供するなど、しけ絹の可能性は確実に広がっている。

ショールームにはストールや祝儀袋、液晶クリーナー、アクセサリなど、しけ絹を身近に感じられる商品も多い。伝統の良さを大切にしつつ、市場ニーズや流行にも目を配りながら、しけ絹の魅力を伝え、伝統産業の再興を期す。



しけ絹シェードの一例。しけ絹独特の質感が空間を落ち着いた雰囲気演出する

Column 富山県の繊維業

富山県では、南砺市城端のしけ絹などをはじめ、長い歴史の中で絹・綿・麻・織物の伝統的技術を育んできた。昭和40年代には、その技術を応用して合繊織物やニット生地製造業へ進出し、産業用資材（カーシート、建築内装材等）や衣料用素材（水着、インナー、スポーツウェア）など高伸縮な生地の開発や新分野を開拓する企業が相次いだ。現在それらは、国内トップシェアを占めている。そして、広範囲な製品を供給するために、紡績、撚糸、編織、染色、縫製、梱包、物流など、多様な繊維産業を形成し、技術が集積された繊維総合産地となった。